

## 言語理論と英語教育 (5)

—— 非対格性の仮説から発想の違いへ ——

田 中 彰 一

### Linguistic Theory and English Teaching (5)

—— From Unaccusative Hypothesis to Different Ways of Expression ——

Shoichi TANAKA

This paper is concerned with the Unaccusative Hypothesis and its relation to different preferences of ways of expression in English and Japanese. The hypothesis shows that English verbs have two types of intransitive verbs: unergative and unaccusative verbs. Ergative verbs, a type of unaccusatives, have a systematic alternation of transitive and intransitive uses. I deal with *there*-constructions, cognitive object constructions, resultative constructions, and adjectival passives, showing that the Unaccusative Hypothesis, if correct, can give a sufficient basis for making a reasonable explanation of these phenomena.

From the reanalysis of English verbs and "5 basic sentence patterns," I argue that learners should have an understanding of different preferences of ways of expression in English and Japanese: English shows a preference for DO expressions and Japanese for BECOME expressions.

#### 1. はじめに

現在の英語教育が「英語コミュニケーション能力」の養成を重視するものになってきたことは言うまでもない。この背景には、文法をマスターすることが必ずしも（特に会話による）伝達能力の習得に結びついていないということがあるであろう。その背景から出てきたコミュニカティブ・アプローチの枠組みでは、伝達能力 (communicative competence) の内容を次の四つの要素に分けることも一般に認められている。<sup>1</sup>

(1) ①文法能力 (grammatical competence)

②社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)

③談話能力 (discourse competence)

④方略的能力 (strategic competence)

①は発音、語い、文法に関する知識・能力であり、

②は適切な文を適切な場面で使える知識・能力、

③はまとまりのある談話や文章を理解し、構成する能力、④はことばの伝達をうまくはこばせるための補修能力とされる。<sup>2</sup> ①については従来教室で扱われてきた内容であるから問題ないとしても、②③④についてはいくらか説明が必要であろう。たとえば、had better という表現を二人称で目上の人に対して用いると、場合によっては警告や皮肉にとられかねないので、通例目下の人に対して使うというような知識は②である。③は文章の構成が古い情報から新しい情報へと流れているのが原則であることを知っていること、代名詞・接続詞を適切に使えるということが含まれる。④は、たとえば、「ケネディ大統領は何番目の大統領か<sup>3</sup>」と尋ねるときに、“Is he the 33rd President?”のように尋ねて、目的の“No, he is the 35th President of the United States.”という答えを引き出すことができるような能力である。

最近これらの要素についてさまざまな検討が加えられており、その成果は言語教育に貢献している。<sup>4</sup>しかしながら、これらの個々の要素についての考察に加えて、それぞれの能力を有機的に結びつける方向での考察も不可欠である。本稿では、この方向から、①の文法能力の原理的な現象を考察することによって、②③④の基となる英語の表現の傾向(好み)と呼べる事実を考察する。具体的には、英語の5文型を再検討し、より柔軟性のある構文指導をさぐる。構文をつくる動詞の交替現象を見て、英語と日本語の表現上の発想の違いを理解する助けとならないかを考える。これは、逆に見れば、日英語の発想の違いを文法のレベルまでもどって、文型という表現に還元する試みになる。ことばに基づく発想の違いを知ることで構文の転換という方策があることを示す。<sup>5</sup>

## 2. 文型とその問題点

英語教育では、英語の文をいろいろな基準で分類してきた。たとえば、次のような分類がある。

(2) a. I am a student at this university.

平叙文

b. How come this place is a mess? 疑問文

c. Stop by any time. 命令文

d. How easy this is! 感嘆文

e. This is not what I meant. 否定文

この分類は、文の機能と結びついており、学習者に文脈での文の意味をはかる手がかりとなるであろう。しかし、ことばは画一的ではない。この分類の問題点は、学習者がこの分類を機能の分類と同一のものであると誤解するところにある。たとえば、疑問を発するときには疑問文を使わなければならないという誤解をもってしまふ。実際は、平叙文の形式でも上昇調のイントネーションで言えば疑問を表すことができるのであるから、(2)の分類は形を分けたものに過ぎないということに留意すべきである。つまり、形式と機能は相対的であり、その対応は柔軟性のあるものである。たとえば、Why don't you~? や You must not~. 等の表現からわかるように、命令をする機能を疑問

文や否定文にもたせることができる。(2)のような分類は機能とは別のものであることを学習者に認識させる必要がある。

同様の問題が「5文型」にもある。学校英語でいう「5文型」は、S、V、O、Cを核として5つの型に分けたものである。5文型による構文指導には、その有用性と並行して多くの問題があることが指摘されてきた。<sup>6</sup>

(3) 1. SV The sun is shining.

2. SVC Your dinner seems ready.

3. SVO That lecture bored me.

4. SVOO I must send my parents an anniversary card.

5. SVOC Most students have found her reasonably helpful.

5文型分類の前提は、名詞句や形容詞句をS、O、Cとして文に必須のものであるとすることである。助動詞や副詞句は勘定されない。いわば骨となる文の核の構造をとらえた分類とすることができる。そこで、(4)を考えてみよう。

(4) a. My office is in the next building.

b. You can put the dish on the table.

上の前提によれば、(4a)はSV、(4b)はSVOとなるが、下線部の副詞句を省略した文は成立しない。そうすると、文の核がなくなると考えなければならない。

(5) a. \*My office is.

b. \*You can put the dish.

したがって、これらの文の副詞句(前置詞句)は必須の要素である。このようなことを考慮して、(4)の2文型を5文型に足して、基本文型は7文型とする文法書、辞書が出てきている。<sup>7</sup>

(4)に基づいて文型を示す。(Aはadverbial(副詞句)とする。)

(6) a. My office is in the next building.

S V A

b. You can put the dish on the table.

S V O A

以上の考察から、基本文型を5文型、7文型のどちらにするにしても、指導上はそれが文の分類

の厳密な基準であるとするのではなく、構文を理解するための一手段である（あるいは一手段にすぎない）と考えることが妥当であろう。

しかしながら、基本的な文型がわかっており、特定の文型や構文を把握することは文の理解に不可欠であり、取り違えることは大きな誤解になるのも事実である。したがって、文型や構文を正確にとらえることは文法能力の基本とすることができる。では、5 (7) 文型の柔軟な理解とはどういうことであろうか。文型を分けるにしても、それぞれの文型は独立したものであろうか。さらに、基本文型を形成している文法の仕組みと呼べるものがあるであろうか。それは、言語の性質とことばのもつ発想に根ざしたものである可能性はないであろうか。特に、基本文型の軸となっている動詞分類にそうした特徴があるのではないか。次節では、これらの問題を考えてみる。

### 3. 非対格性の仮説 (Unaccusative Hypothesis)

5文型についてよく見ると、個々の文型間には何らの関係があるのではないかという疑問が生じる。実際、核となっているV (動詞) がとれる文型はひとつに限られない。たとえば、動詞によっては多くの文型を可能とするものがある。<sup>8</sup>

(7) a. I found the map. (SVO)

b. I found her a Mexican. (SVOC)

c. Mary found me a taxi. (SVOO)

このような場合は、動詞に意味の幅があり、可能な文型が複数あるという指導になると思われるが、英語には自動詞用法と他動詞用法を同形態で許す体系的な文型の交替がある。

(8) a. The tomatos grow. (SV)

b. John grows the tomatos. (SVO)

(9) a. The glass broke. (SV)

b. John broke the glass. (SVO)

(10) a. The theory developed. (SV)

b. John developed the theory successfully. (SVO)

自動詞の主語と他動詞の目的語が同じであることに注目したい。動詞の意味内容も自他の違いはあ

るものの、ほぼ同じ現象を指すと言えるであろう。ここでは、括弧に示したように、SVとSVOの交替が起こっている。この交替は動詞の語彙レベルの問題であり、たとえば態の変更である能動文と受動文の関係とは異なっている。この交替を示す英語の動詞は、実際かなりの数に上る。<sup>9</sup>このような交替が数多くあることは英語ということばの特徴である可能性があり、さらにその意味するところを考えてみる必要があるであろう。

英語の動詞を自動詞と他動詞に分けることは、文法の初歩であるが、(8)(9)(10)で見たSVとSVOの交替現象を示す動詞を見ると、自動詞用法での主語は状態や位置が変化するもので、しかも自分の意志で動作をするのではなく、自然にそうなるといふ意味合いをもっていることがわかる。その証拠に、意図や意志が必要な自動詞の場合は上で見た自他の交替がない。

(11) a. John swam across the river. (SV)

b. \*The teacher swam John. (SVO)

(12) a. Mary danced. (SV)

b. \*The director danced Mary. (SVO)

(13) a. Mary smiled. (SV)

b. \*The story smiled Mary. (SVO)

また、生理的現象を表す動詞にもこの交替がない。

(14) a. The baby slept. (SV)

b. \*The baby-sitter slept the baby. (SVO)

以上のことから、自動詞には意味により他動詞構文と交替するものとししないものの2種類があることがわかる。この区別を、後で見る「非対格性」の仮説にしたがって、非対格自動詞と非能格自動詞と呼ぶことにしよう。その英語の動詞の分類を次のように示すことができる。

(15) 

|        |     |   |        |
|--------|-----|---|--------|
| (15) { | 他動詞 | ┌ | 非能格自動詞 |
|        | 自動詞 |   |        |
|        |     |   |        |

(16) a. Mary wrote a letter. (他動詞)

b. Mary talked. (非能格自動詞)

c. The glass broke. (非対格自動詞)

「非対格性の仮説」とは、「非対格自動詞は基底では目的語位置にある要素が主語になっている」と

いうもので、Permutter (1978) が最初に提案したものである。<sup>10</sup> その分類をまとめておこう。<sup>11</sup>

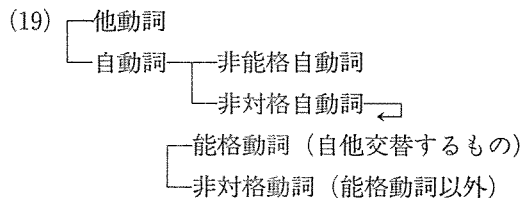
(17) 非対格自動詞

- a. 形容詞を含む状態動詞：be
- b. 受け手 (Patient) が主語となる自動詞：  
burn、break、drop、sink、melt、open
- c. 存在や出現を表す動詞：happen、occur、  
exist、last、remain
- d. 感覚と関係する放出動詞：shine、smell、  
clang、glow
- e. アスペクト動詞：begin、start、stop、  
continue

これに対して非能格自動詞は次のような動詞とされる。

- (18) a. 意志や意図をともなう行為の自動詞：  
work、talk、think、walk、knock、cry
- b. 生理的現象を表す動詞：cough、vomit、  
sleep、belch

ここで注意しなければならないのは、非対格自動詞のすべてが自他交替するわけではないことである。(8) (9) (10) で見た自他の交替を示す動詞は典型的に(17b)にあたる。そうすると、影山(1996: 140ff) が示しているように、同形態で自他交替する動詞類を能格動詞<sup>12</sup> とし、それ以外を非対格動詞と区別することが可能である。この下位分類を含めた動詞分類を示すと次のようになる。



この区分にしたがって、今後は自他交替する自動詞を「能格動詞」、能格動詞以外の非対格自動詞を「非対格動詞」と呼ぶことにする。

能格動詞が示す自他交替と(3)で見た5文型の形式を思い起こすと、能格動詞は第1文型と第3文型で(動詞が同形態で)交替可能である。伝統的に言えば、能格動詞は自動詞用法と他動詞用法をもつということになる。英語の文法上重要なのは、非対格性の仮説を認めないと、自動詞用法と

他動詞用法は個別の現象となってしまう、一定の規則的な対応関係があることを見落とすことになってしまうことである。特に、他動詞用法の目的語が自動詞用法の主語にあたり、同形態の動詞の意味内容が等価であるということは英語の特徴的現象と言える。また、そうした動詞群<sup>13</sup>があるという事実は重要な言語的意味をもっているはずである。(どちらの構文が基本となるかが問題になる。)さらに、この事実は第1言語としての習得だけでなく、英語を外国語として学習する場合にも意味をもつと推測できる。

一方で、日本語は自動詞と他動詞で形態が異なる。(17b)にあげてある英語の動詞にあたるものを見てみよう。

|      |       |     |
|------|-------|-----|
| (20) | 自動詞   | 他動詞 |
|      | burn  | 燃やす |
|      | break | 壊す  |
|      | drop  | 落とす |
|      | sink  | 沈める |
|      | melt  | 溶かす |
|      | open  | 開ける |

このように日本語では自動詞と他動詞で異なる接辞形態があり、複雑な状況が見られる。英語では語順による文法関係を見ると、日本語では主語に「～が」が対応し、他動詞の目的語に「～を」が対応することになる。日本語では、他動詞から自動詞を導く<自動化>、自動詞から他動詞を導く<他動化>、同じ語幹から自動詞と他動詞を導く<両極化>の3つの接辞による派生が知られている。<sup>14</sup> 問題は、英語の場合と同じように、どの形式が基本形として日本語の発想の基本になっているかである。この問題は英語と比較しながら第5節で見ることにする。

#### 4. 仮説の検証

上で見た非対格性の仮説「非対格自動詞は基底では目的語位置にある要素が主語になっている」にしたがって動詞の基底構造を示すと、次のように簡略して示すことができる。

(21) a. 名詞句+動詞+名詞句。(他動詞)

b. 名詞句+動詞。(非能格自動詞)

c. \_\_\_\_ + 動詞+名詞句。(非対格自動詞)

(21a)と(21b)はもともと基底主語のある文であるから問題はないであろう。問題は、主語がない(21c)の基底構造である。これを便宜上「非対格構造」と呼ぶことにしよう。さらに(21b)を「非能格構造」と呼ぶことにする。これらの基底構造は生成文法の枠組みでは一般に認められている<sup>15</sup>が、論証が済んでいる構造であるとは言えない面も持っている。証拠とされる統語論的議論を見ておくことにしよう。

まず、非能格構造(21b)と非対格構造(21c)を確認しよう。

(21) b. 名詞句+動詞。(SV)

c. \_\_\_\_ + 動詞+名詞句。(VO)

この構造の違いが語順の違いとして、動詞に対応して表面上出てくるようなことがあれば、仮説を支持することになるが、実際、イタリア語では、非能格と非対格の対比が語順に出る。移動や状態を表す非対格自動詞の場合、主語は動詞の後にくる。

(22) a. Entrarono degli soldati.

(Some soldiers came in.)

b. Accadde un'incident.

(An accident happened.)

これに対して、動作主や経験者の場合、主語は非能格自動詞に先行する。

(23) a. Giorgio parlava.

(George was speaking.)

b. Mio fratello dormirà.

(My brother will sleep.)

このように、イタリア語では(21b)(21c)の基底構造を表層の語順が反映していると見てよい。<sup>16</sup> SVOタイプの英語ではこのような対比がそのまま表層で出ることはないが、以下で見るようにいくつか非対格性を支持する構文がある。

#### 4.1. There 構文：その例外性の扱い

5文型の指導においては、there 構文の取り扱いが問題となってきた。There を主語とみなして

SVO や SVC としたり、動詞の後の名詞句が意味上の主語であることから主語を動詞の後に移動して、空いた主語の位置に there が挿入されるとする指導になっている。この構文は特殊構文、例外構文とされるべきものであろうか。(21c)の非対格構造をみると、主語の位置は空になっている。そこで、その位置に there が出ると考えてみよう。そうすると、there 構文に出てくる動詞は非対格自動詞ということになる。実際、この予測は実証される。<sup>17</sup>

(24) a. There comes a time in the lives of most of us when we want to be alone.

b. There lay a statesman of no mean qualities: (BROWN コーパスから)

(25) a. \*There quarreled two boys in the room.

b. \*There wrote a housewife a fascinating novel. (影山1996から)

ただし、there 構文は機能的には存在や出現など場面への提示を表すので、非対格動詞であっても消失や消滅の意味になると不可能である。

(26) a. \*There disappears a monster into the sea.

b. \*There vanished two boys from the sight.

このように there 構文の基底が(21c)の非対格構造とすると、there 構文は第3文型になろう。There が挿入されず、代わりに目的語の位置の名詞句が主語にあがるとSVの自動詞構文となるのである。There が挿入できる条件は、存在・出現を表す動詞でなければならないことである。<sup>18</sup>

#### 4.2. 同族目的語構文：自動詞が目的語をとるといふ例外性の説明

英語では、同族目的語構文と呼ばれる、自動詞が目的語を例外的に取っているような構文がある。非能格自動詞の基底構造(21b)と非対格構造(21c)を見ると、前者では基底で目的語はないが、後者では目的語があることになる。したがって、同族目的語を取ることでできる自動詞は、前者の非能格自動詞に限られ、非対格自動詞では不可能で

あるという予測ができる。実際、大部分そのとおりのようである。

- (27) a. Mary smiled a bright smile.  
 b. John slept a sound sleep.  
 (28) a. \*The ship sank a strange sinking.  
 b. \*An accident occurred a mysterious occurrence.

したがって、非能格自動詞の基底では目的語はなく、非対格自動詞の基底では目的語があるという(21b)(21c)の構造は正しい予測を導く。

#### 4.3. 結果構文：目的語制約

英語の結果構文は一文で2つの事象を表すことのできるユニークな構文である。<sup>19</sup>

- (29) a. Mary pushed the door open.  
 b. John hammered the metal flat.  
 (29a)は「Maryがドアを押した」ということとその結果「ドアが開く」という2つの事象を一文で表現している。日本語では同じように表現できず、ドアを「押し(て)開いた」としなければならない。(29)のopen, flatは目的語を修飾しており、一般に結果述語は主語にかかることはできない。  
 (30) a. \*Mary pushed the heavy door exhausted. (重いドアを押して疲れた。)  
 b. \*John hammered the metal happy. (金属をたたいて楽しくなった。)

このように、結果の述語は目的語だけを修飾することを直接目的語制約(Direct Object Restriction: 以下DOR)と呼ぶことがある。

##### (31) DOR

結果述語が叙述する名詞句は目的語でなければならない。

これまでの例文の動詞は他動詞であるが、結果構文は自動詞でも成立する。ただし、成立するのは非対格自動詞(能格動詞)で、非能格自動詞では成立しない。

- (32) a. The water froze solid.  
 (水は凍って固まった。)  
 b. \*The dog barked hoarse.  
 (犬は吠えて喉をからした。)

(31)のDORが正しいとすると、(32a)では結果の述語solidが主語にかかることになり、DORに反する例となってしまう。これらは、非対格性の仮説から説明できるであろうか。

ここで、非能格構造(21b)と非対格構造(21c)をもう一度確認しよう。

(21) b. 名詞句+動詞。(非能格構造)

c. \_\_\_\_+動詞+名詞句。(非対格構造)

前者では基底で目的語はないが、後者では目的語がある。後者の自動詞用法では、動詞の後の名詞句が主語の位置にあるため、痕跡(trace: t)が残されると仮定してみよう。そうすると、(32a)は次の構造になる。

(33) The water<sub>t</sub> froze t<sub>t</sub> solid.

つまり、the waterは主語になっていても、結果の述語と直接の関係を持つのではなく、目的語の位置にあるt<sub>t</sub>が間に介在することになる。この痕跡は目的語の位置にあるので、DORの違反とはならないことになる。一方、(32b)は非能格構造であるからそのような痕跡はないので、DORに違反し非文となると正しく説明できる。非能格自動詞でも目的語の位置に名詞句があれば、DORに違反せず結果構文は成立する。

(34) a. The dog barked itself hoarse.

(犬は吠えて喉をからした。)<sup>21</sup>

b. Mary ran the soles off her shoes.

(Maryは走って靴底が剥げた。)

このように、結果構文の持つ特異性もまた非対格性に基づく(21b)(21c)の構造での説明できる。

#### 4.4. 基底構造

さらにいろいろな現象を見ることもでき、多くの議論がある。<sup>22</sup>たとえば、形容詞的受動形(adjektiv passive)の現象も非対格性と関係する。形容詞的受動形は、次の例のように過去分詞が名詞を修飾する現象を言う。

(35) a painted car, polished shoes, fried potatoes  
 用いられている動詞は他動詞であり、動詞的受動

文における関係と同じように、主名詞句はもともと目的語の関係にあったものである。そうすると、これまで見てきた場合と同じように、目的語を基底でもつ非対格自動詞は形容詞的受動形になれるが、非能格自動詞はなれないという予測になる。実際予測通りになる。

- (36) a. fallen leaves, rotten eggs, broken legs  
 b. a newly emerged scandal, a recently appeared book<sup>23</sup>

(37) \*danced girls, \*a run boy, \*a cried baby  
 このように語彙的なレベルの現象でさえ非対格性の仮説を支持し、非対格構造の存在を示唆とすることができる。

これまで見てきたように、非対格性の仮説はそれに基づく非能格構造と非対格構造を裏付ける構文・現象があると言えるであろう。それらの構造は基底構造であり、表面的に見られるものと異なるが、言語の持つ派生的な性質や階層的な性質から見ると、文法的に妥当なものと考えられる。前の節で見たように、この構造の違いをもつ動詞には一定の意味的な違いがあるのであり、意味の普遍性から非能格・非対格の違いを見ることも可能である。実際影山 (1996) は、その方向からの研究であり、語彙概念構造を用いた精緻な議論の中で、多くの示唆的な観察、新しい事実の指摘、分析に基づく新解釈を行っている。

## 5. 日英語の発想の違いへ

ことばのもつ発想の違いを論じる場合、個々の対応する表現を取り上げて、その違いを強調する傾向がある。<sup>24</sup>たとえば、「運転免許をとる」を英語にする場合に、「とる=take」の逐語的な発想から、I'll take a driver's license. と言ってしまう間違いを指摘したものや、誰かに道を譲るような場合に「お先にどうぞ」の意味で Go before me. と言ってしまう誤りに対して、どういう表現にすればいいかを教えてくれるものである。<sup>25</sup>こうした指摘を集めた文献はかなり多く、今でも発行され続けている。もちろん、表現について知っていることは必要であり、それなりに英語

の慣用表現の知識を得られるものではある。しかしながら、日本語を逐語的に英語にした表現を持ち出して誤りを指摘するだけでは一過性の印象的考察で終わってしまい、第1節で見たことばの伝達能力の発達に結びつきにくい。体系的な表現の違い(ひいては発想法の違い)に基づく指摘になっていないからである。もっと言えば、日英語の違いについて固定化した観念を持ってしまい、ことばのもつ柔軟性に気付かない弊害さえ懸念される。

より重要なのは、表現の違いを生み出す日英語の発想の違いに目を向けることであり、新しい表現に出会ったり創り出したりするときに活用できることばについての対照的理解を持つておくことである。そのような理解が、表面的なもので終わらないためには、ことば全体にかかわる表現の傾向(好み)を知らなければならない。しかも、この傾向については表面的な文化比較から接近するのではなく、ことばの深い理解から推測する必要があると思われる。この方向の考え方が正しいとすると、より説得的な英語教育のための視座が得られるのではないだろうか。英語教育で「英語の発想を自分のものにする」と言われることがあるが、実際に英語ということばの表現を吟味する必要があるのである。

前節まで見てきた非対格性の性質はことばの本質にかかわる側面を持っており、そこから考えて出してみることは日英語の発想を問い直す意味でよい出発点になる。とくに能格動詞(ergative verb)の存在は、表現の傾向を考える際に示唆的である。実際、そのような指摘がコウビルド英英辞典<sup>26</sup>にある。

- (38) An ergative verb is used both in the pattern v and in the pattern v n, e. g. *The vase broke* and *Fred broke the lamp*. The noun group that is the subject in the v pattern refers to the same kind of thing as the noun group n in the v n pattern. For example, *vase* and *lamp* in the examples above are both breakable objects. Ergative verbs allow you to describe an action from the point of

view of the performer of the action or from the point of view of something which is affected by the action.

後半部で、能格動詞の他動詞用法と自動詞用法が実は表現の差に結びつくことが示されている。つまり、ひとつの事象をどう表現するかという際の選択肢として、他動詞的言い方をするか、自動詞的言い方をするかということが考えられるのである。

「他動詞的」というのは、すでに見てきたように能格動詞の他動詞用法で「～をする」という対象に働きかける意味合いになる。他方、「自動詞的」というのは、上の指摘からわかるように、対象から状況を見る見方であり、受身的な視点であるが、受動態のそれとは異なる。状況が成立するという「～になる」という意味合いであると言える。つまり、能格動詞は英語というひとつの言語の中でも「する」と「なる」の両方の視点に関係することを示している。問題はどちらを基本としているかである。影山(1996:140ff)によれば、「他動詞的」用法が基本であってそこから「自動詞的」用法、つまり能格自動詞が作られるとしている。影山の語彙概念構造に基づく精緻な論考を詳述する余裕はないが、たとえば、次のような対比がある。(39) a. The storm broke the window./The window broke.

b. He broke the promise./\*His promise broke.

(39a) (39b)のどちらの意味合いでも他動詞構文が可能であるのに対して、(39b)に対応する自動詞構文は成立しない。(39a)の「窓」がガラスなどの素材の性質で壊れることがあるのに対して、(39b)の「約束」は人が破らない限り壊れるものではないからと考えられる。成立する構文を基本とすると、他動詞用法が基底にあることを示していると見ることができる。影山の研究では、他動詞用法から自動詞用法を導く反使役化が提案されている。本稿では、この提案が基本的に正しいと仮定して考えてみる。

上で見た「する」と「なる」の対比に話をもち

し、他動詞用法が基本であるとする、そこから英語のもつ「する」的な性質が出てくるとすることは大きく間違っていないと思われる。さらに詳しい考察が必要ではあるが、能格動詞の数の多さから英語という言語全体について考えてもそう言えるであろう。これに対して、日本語の方は第3節で見たように、形態変化で自動詞と他動詞の区別をするのであるが、どう見ればいいであろうか。影山(1996)の指摘によると、日本語の自動詞と他動詞の自他交替は接辞が担うために双方向の派生が考えられ、特に自動詞から他動詞が作られる派生が発達している。実際、日本語では受動態、可能態、自発態、使役態など接辞による態の体系が整備されている。また、日本語では自動詞の受動態が可能であることを考えると、自動詞的用法が基本となっているのではないかと思われる。つまり、「なる」の視点を中心に行っているということになる。

以上見てきた、英語の「する」的な性質と日本語の「なる」的な性質は、多くの文献<sup>27</sup>で指摘されいろいろな立場から考察されている。とくに、対照言語学の分野では英語と日本語の対応する表現を比較することで多くの現象が明らかにされてきている。それらの研究でまとめられた日英語の表現の傾向を表にすると、次のように示すことができるであろう。<sup>28</sup>

(40)

|            | 英語   | 日本語  |
|------------|------|------|
| 中心となる表現の傾向 | する   | なる   |
| 中心となる構文の傾向 | SVO  | SV   |
| 中心となる品詞の傾向 | 名詞中心 | 動詞中心 |
| 中心となる指向性   | もの指向 | こと指向 |

つまり、ある事象をことばにする際、英語はする表現を基本に考えるので、他動詞構文であるSVOの文型が中心となる。この構文に表現をまとめ上げるには名詞(句)の中に意味内容を凝縮するなどの工夫が必要になる。たとえば、無生物主語構文にその傾向を見ることができる。

(41) Your ignorance of theology and medicine is



appalling!<sup>29</sup>

また、ここでは、表現の際に明らかに「もの」を取りかかりとして表現しようとする発想がある。他方、日本語はなる表現を基本にするので、次のように、英語ではSVOで表現することを「～になる」(SV)の形にできる。

(42) a. We are going to give a party next week.

b. 来週パーティを開くことになりました。

すでに見たように、日本語では接辞が発達しており、英語とは逆に動詞が表現の要になり、ひとつの出来事や状況が成立するという「こと」指向がある。詳しくは出典の議論に譲らなければならないが、以上のようにまとめることは妥当であろう。さらにいえば、「Xが～する、XがYに～する」という英語型が「Xが～になる、XがYによって～になる」という日本語の型と対応するということである。もちろん、この傾向は相対的なものであって、どちらの言語にも「する」と「なる」の表現はある。(40)で示しているのは、表現をつくり、発想する際の傾向であることに留意されたい。

### 6. 構文の転換

これまで見てきたように、非対格性の仮説は複数の構文で検証可能であり、さらに英語の表現とその傾向に多くの示唆を示している。この表現の傾向から英語の指導上の背景的な留意点、ことばの学習における方策といったものが考えられないであろうか。(40)で見た表現の傾向の差を、前半で見た英語の動詞が示す構文から見るとき、英語と日本語のずれを修復するような見方があるのではないであろうか。つまり、英語が「する」的な言語であるならば、「なる」的な言語である日本語を母語とする学習者が英語を習得する際には、ある種の体系的な調整<sup>30</sup>が必要とされるのではないかと考えている。この見方が正しいとすると、日本語話者が英語を習得する際の態度を示すことができる。本節ではこの問題を見てみよう。<sup>31</sup>

表現しようとする事象は同じであると言えるので、まずそこから考えてみる。事象を表現する際

の基本的な文の意味タイプを考えてみよう。まず、「する」としたものは「何かが何かをする」という「行為 (action)」と考えられる。また、「なる」としたものは、日本語が示唆するとおり、基本的には「何かが～から～の状態になる」という移動の関係と捉えることができる。これを過程 (process) と呼ぶことにする。しかし、事象を扱う際には、こうした動きのある場合ばかりでなく、ある物が単に「ある (いる)」という静止の関係を足さなければならない。これは意味論では状態 (state) と呼ばれる。中右 (1994)<sup>32</sup>にしたがって、この行為・過程・状態の3つは現実世界の事象を認知する際の基本的な捉え方と考える。さらに、この基本的捉え方にはそれぞれの言語で表現される表現型があると仮定してみよう。英語の場合、それらをそれぞれ DO、BECOME (COME)、BE のタイプと呼ぶことにしよう。対応する日本語の表現タイプをスル、ナル、アル (イル) と呼ぶことにする。以上を図式化してみると、次のようになる。<sup>33</sup>

|   |    |        |    |
|---|----|--------|----|
|   | 状態 | 過程     | 行為 |
| 英 | BE | BECOME | DO |
|   | ⇕  | ⇕      | ⇕  |
| 日 | アル | ナル     | スル |

矢印で示したように、英語も日本語も言語であるのだから、状態の事象は状態の表現で、過程の事象は過程の表現で、行為の事象は行為の表現でことばにされると考えるのは自然であるし、実際そうした共通部分が多いはずである。<sup>34</sup>つまり、たとえば、状態の事象を英語で BE のタイプの表現をするのであれば、日本語でも同じ事象をアルで表現する機会が多いということである。問題は、対応がずれる場合である。たとえば、(42)で見た事実は、英語の DO に対して日本語ではスルではなくナルが対応する場合である。(43)の図式を用いると、次のように破線の矢印で示すことができよう。

|   |    |        |    |
|---|----|--------|----|
|   | 状態 | 過程     | 行為 |
| 英 | BE | BECOME | DO |
|   | ⇕  | ⇕      | ⇕  |
| 日 | アル | ナル     | スル |

これは、(40)で見た日英語の「なる」と「する」

の違いであり、多くの文献で指摘されてきたずれに他ならない。紙幅の都合で多くの例を見ることができないが、たとえば、知覚動詞の場合を見てみよう。日本語の視覚に対応する英語表現は see, look, watch などであるが、「見える」という場合はナル表現と考えられる。これには see だけが対応する。同様に聴覚の listen, hear の中で hear だけが「聞こえる」のナル表現に対応する。そのため、たとえば、『サラダ記念日』にある(45a)の「聞く」はスル表現でありそこに短歌のおもしろさもあるのであるから、英語の対訳(45b)ではおかしいということになる。<sup>35</sup>

(45) a. 電話からすこし離れてお茶を飲む  
聞いているよというように飲む

b. My father sitting/a hort distance from  
the phone,/over his tea.  
Drinking as if he is not/hearing a single  
word.

また、次の例もナルと DO の対応であると考えられるかもしれない。

(46) a. 彼女はいい奥さんになるだろう。  
b. She will make a good wife.

この用法の make は「～になる」の意味で辞書記載されるが、使役の他動詞としての make (DO 表現) の再起目的語が落ちて自動詞化した用法と見る説もある。さらに、無生物主語になって、Wood makes a good fire. になると、DO 表現に近いと感じられる。

さらに、状態を示す日本語のアル文が英語では DO 表現になる場合を見てみよう。

|      |    |        |    |
|------|----|--------|----|
| (47) | 状態 | 過程     | 行為 |
| 英    | BE | BECOME | DO |
|      | ⇕  | ⇕      | ⇕  |
| 日    | アル | ナル     | スル |

この場合が日本語のウナギ文「僕はコーヒーだ。」である。(この場合はいわゆる同定文であり、「状態」であると考えられる。) 文脈によりいろいろな内容を表すことができる。典型的には、I would like to have coffee. であろう。(ただし、「僕になりたいのは先生だ。」の意味での「僕は先生だ。」は I want

to be (come) a teacher. と BECOME の構文に対応する。) ここで注目すべきは、「僕はコーヒーだ。」をアルの発想で「I am coffee. としてしまうのではなく、構文の転換をして、適切な英語表現とするということである。さすがにこうした誤用は少なくなっているとは思われるが、日本語のアルの発想を英語では DO (または BECOME) に変える必要があるということを示している。

逐語訳に見られるように、日本語と英語を 1 対 1 対応として固定したもとする誤解を解いて、表現がうまく対応しない場合は構文の転換をする必要があることを知るということは重要である。依然として教育現場に見られる、英語から日本語への意味のない置き換えから脱却できる視点を持つようにしたい。それぞれの言語の発想の傾向を理解することができれば、英語の発想を意識した表現への転換も容易になると考えられる。<sup>36</sup>

## 7. 結語

本稿では、非対格性という英語の動詞の特徴に注目し、日英語の表現に見られる発想の違いを知ることが英語教育に役立つということを論じてきた。「する」と「なる」の視点はどちらの言語にも存在する。問題は、表現する際の傾向(好み: preference)の問題である。多くの文献で英語が「する」型、日本語が「なる」型であることが示されているが、すでに述べたように、これは程度の問題であり、表現方法自体は連続したものと見るべきであろう。それぞれの言語でどこに表現の視点を置くかで表現の傾向が出てくると考えるべきである。そのような理解に立って英語によるコミュニケーションをはかることは、柔軟な対応を可能にすると思われる。第 6 節で試験的に示した構文の転換はそのための一方策である。

## 註

<sup>1</sup> Canale and Swain (1980) を参照。

<sup>2</sup> ②はことばの丁寧さと関係する。

<sup>3</sup> この内容を英語に直訳できないことはよく知られている。“How many presidents were

there before Kennedy?”も④に基づく尋ね方になる。

<sup>4</sup> Ellis (1997) 参照。

<sup>5</sup> ③の談話能力の必要性については、田中(1993b)で論じている。

<sup>6</sup> 安井(1973)の中の「文型の概念とその問題点」と池上(1991)の中の「いわゆる「五文型」の不十分さ」の議論が参考になる。

<sup>7</sup> たとえば、Quirk 他(1985)、研究社『英和中辞典』第5版(1985)、大修館書店『ジーニアス英和辞典』(1988、1994)などである。

<sup>8</sup> 補文のもつ文型の意味の差については Tanaka (1993a: 32) を参照。

<sup>9</sup> 安井(1995: 107)によると、510という無視できない数になっている。

<sup>10</sup> 関係文法の枠組みでは非対格動詞 (unaccusative verb)、Burzio (1986) の GB 理論の枠組みでは能格動詞 (ergative verb) と呼ばれ、用語が整理されていない。また、あとで見るように、影山 (1996: 140-178) では、非対格動詞と能格動詞を区別する必要があると論じられている。

<sup>11</sup> Permutter (1978: 162-163) から一部を引用。

<sup>12</sup> 「能格 (ergative)」とは、もともと、能格型言語において他動詞文の目的語と自動詞文の主語が同一の絶対格 (absolutive) になる場合の他動詞文の主語が示す格を指す。

<sup>13</sup> 註9で見たように、500以上にのぼる。

<sup>14</sup> 影山 (1996: 179) から。

<sup>15</sup> There 構文と非対格性については、三原 (1998)、影山 (1993)、高見・久野 (1999) 等での議論を参照。高見・久野 (1999) は、there 構文の動詞が非対格自動詞に限られるという仮定は間違いであるという反証をしている。

<sup>16</sup> これらのデータは Bright (1992: 241) による。さらに、イタリア語には ne 接辞化の現象等があり、非能格と非対格の動詞の対比をより明確に示す。詳しくは Burzio (1986: 20ff) を参照。

<sup>17</sup> 註15を参照。

<sup>18</sup> Be 動詞の場合は、第2文型 SVC と対応づけることになろう。

(i) a. \_\_\_\_ is a unicorn.

b. There is a unicorn.

(ii) a. \_\_\_\_ are people sick.

b. There are people sick.

cf. People are sick.

<sup>19</sup> SVOC とすると、標準的な SVOC 構文とのズレが生じる。田中 (1993a) の議論参照。

<sup>20</sup> 結果の述語は、次の付帯的な述語とは区別される。

(i) a. Mary left the room angry.

(Mary は怒ったまま出ていった。)

b. John ate the meat raw.

(John は肉を生で食べた。)

Angry, raw は記述述語で「～の状態」という付帯状況を表し、それぞれ主語と目的語にかかっている。

<sup>21</sup> この文のような再帰形を擬似再帰形 (fake reflexive) と呼ぶことがある。

<sup>22</sup> 本文で扱っていない現象については、Burzio (1985)、Levin and Rappaport (1995)、影山 (1996) 等を参照されたい。

<sup>23</sup> Levin and Rapoport (1995: 150) から引用。

<sup>24</sup> 「英語では日本語に比べて Yes, No をはつきり言う。」など、misleading な指摘も多い。

<sup>25</sup> それぞれ、次の表現が適切であろう。

(i) a. I'll get a driver's license.

b. Please go ahead./After you.

<sup>26</sup> 引用は p. xxix から。辞典の記載は V-ERG の表示になっている。

<sup>27</sup> 特に、荒木(1980)、安西(1983)、池上(1981)を参照されたい。

<sup>28</sup> 「原因中心」: 「結果中心」、「うち」: 「そと」、「個人」: 「全体」など、他にも多くの因子を考慮すべきであるが、ここでは言語に基づく発想の考察をしていることに注意されたい。文化や慣習に基づく発想の違い、とくにコミュニケーションの不成立の議論は多い。

<sup>29</sup> 出典は Charles M. Schulz 1970

*Goodnight Snoopy* から。Lucy の台詞。主語は you are ignorant of theology and medicine と文の形に読み解くことができる。江川 (1991: 30ff) は、このような名詞中心の表現を「名詞構文」と呼んで詳しく扱っている。また、学校英文法におけるこの構文の取り扱いが不十分であるとの指摘がある。

<sup>30</sup> Ellis (1997) で論じられている中間言語 (interlanguage) からの接近も可能であると思われる。

<sup>31</sup> ひとつの構文現象だけでは言語の比較対照には不十分であるという批判があるかもしれない。また、日本語の考察が不足していることも認めなければならない。しかし、非対格性と関係する英語の動詞の仕組みから、日英語の表現について体系的な違いがあるという示唆を得られた。つまり、他動詞は一応置いておくとして (他動詞表現についても、日英語に意味の差がある可能性がある。特に使役の意味合いは日英語で違いがありそうである。)、英語の自動詞表現がそのまま日本語の自動詞表現に対応するものでないという示唆である。

<sup>32</sup> 詳しくは中右 (1994: 310ff) を参照されたい。

<sup>33</sup> この関係づけは試験的なものである。文型などの形式と意味がどうかかわるのかを示す必要がある。DO 表現に SVO の構文が当てはまるとは限らない。たとえば、SVO の John resembles his father. は状態 (BE) を表している。ここには、他動 (詞) 性と行為の対応がどうなっているかという問題がある。

<sup>34</sup> そうでなければコミュニケーションがそもそも成り立たないはずであり、翻訳なども不可能になる。しかしながら、たとえば、BE とアルでそれぞれの言語で位置づけられた違いがある場合がある。所有を表す場合が好例である。

(i) a. この部屋には窓が3つある。

b. This room has three windows.

(ii) a. John には2人の子供がいる。

b. John has two children.

「持っている」という意味の have は状態を表し、英語で所有を表す典型的な表現である。これに対して、日本語では「\*この部屋は3つの窓を持っている。」などとは言えず、アル発想で表現される。ただし、(40)の対比で見たように、形式的には日本語は SV、英語は SVO となっている。

<sup>35</sup> ピーターセン (1990: 133) で論じられている例を借用。ちなみに新しい英訳は次のようになっているとして引用されている。

Moving away from the telephone/he sips his tea as if to say/“I’m not listening.”

<sup>36</sup> 註の33で述べているように、ここで用いた図式化は試験的なものに過ぎないので、文型の対応などを今後検討したい。

#### 参考文献

- 荒木博之. 1980. 『日本語から日本人を考える』朝日新聞社.
- 安西徹雄. 1983. 『英語の発想』講談社.
- Bright, William (ed.) 1992. *International Encyclopedia of Linguistics. Volume 2*. Oxford University Press.
- Burzio, L. 1986. *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Reidel Publishing.
- Canale, M. and M. Swain. 1980. “Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing,” *Applied Linguistics* 1, 1-47.
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』金子書房.
- Ellis, Rod. 1997. *Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- 池上嘉彦. 1981 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 池上嘉彦. 1982 「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語—」『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』大修館書店. 32-110.
- 池上嘉彦. 1991 『〈英文法〉を考える—〈文法〉と

- 〈コミュニケーション〉の間』筑摩書房。
- 稲毛逸郎・田中彰一・西原俊明・藤岡克則. 1997. 『A New Approach to English Grammar』松柏社。
- 影山太郎. 1996『動詞意味論』くろしお出版
- Levin, B. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. University of Chicago Press.
- Levin, B. and T. R. Rapoport. 1995. *Unaccusativity*. MIT Press.
- 三原健一. 1998『生成文法と比較統語論』くろしお出版。
- 水谷信子. 1985『日英比較話しことばの文法』くろしお出版。
- 中右実. 1994『認知意味論の原理』大修館書店。
- 中右実・西村義樹. 1998『構文と事象現象』研究社。
- Permutter, David, M. 1978. "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis," *BLS* 4, 157-89.
- Permutter, David, M. and Paul M. Postal. 1978. "The 1-Advancement Exclusiveness Law," in D. Permutter and C. Rosen (eds) *Studies in Relational Grammar 2*, 81-125. University of Chicago Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Sinclair, John (ed.) 1995. *Collins Cobuild English Dictionary*. HarperCollins Publishers.
- 田路野彰. 1999『「創る英語」を楽しむ—「暗記英語」からの発想転換』丸善。
- 高見健一・久野暉. 1999. 「There 構文と非対格性 (1)(2)(3)」『英語青年』1月号 17-23, 2月号 18-25, 3月号29-32.
- 田中彰一. 1993a. 「言語理論と英語教育(1)—英語の文を理解する—」『佐賀大学教育学部研究論文』集』40, No. 3, 25-37.
- 田中彰一. 1993b. 「言語理論と英語教育(2)—伝達機能の重要性—」『佐賀大学教育学部研究論文』集』41, No. 1 (I), 39-53.
- 安井稔. 1973『英語教育の中の英語学』大修館書店。
- 安井稔. 1995『納得のいく英文解釈』開拓社。
- 吉川千鶴子. 1995『動詞の文法—発想の違いからみた日本語と英語の構造』くろしお出版。